

フランス語の代名動詞と再帰構文の類型

井口, 容子
広島大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7402166>

出版情報 : Stella. 44, pp.153-164, 2025-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



フランス語の代名動詞と再帰構文の類型

井 口 容 子

1. はじめに

いわゆる「中間構文」をめぐるのは、その統語構造が非対格であるのか、それとも非能格であるのか、ということが論じられてきた。これは単に構造的な興味だけではなく、意味論的にも「個体レベル述語 / ステージレベル述語」の区別などにかかわる問題であるといえる。さらに英語やオランダ語などの中間構文と、フランス語の受動的代名動詞を含むロマンス語の対応する構文が、この点において異なる振る舞いをみせるというのも、しばしば指摘されるところである。

生成文法の系統の理論において、類型論的視点を取り入れながら、この問題を考察したふたつの興味深い流れがある。ひとつは Lekakou (2005, 2008 等) の一連の研究、もうひとつは Reinhart and Siloni (2005) および Reinhart の理論的枠組みにおいて、中間構文に的を絞って分析した Marelj (2004) の研究である。このふたつはそれぞれ独自の立場から、通言語的なヴァリエーションを主張している。前者の Lekakou については、井口 (2012) などで論じた。本稿においては後者の Reinhart and Siloni (2005), Marelj (2004) の分析を中心に考察してみたい。

2. 語彙・統語パラメータ

Reinhart & Siloni (2005) は、再帰動詞 (reflexive verbs) や中間構文などの «arity operation» (項構造に作用する、広い意味でのヴォイスにかかわる現象) が関係する構文において、通言語的なヴァリエーション (変異) を決定するパラメータが存在する、と主張する。Reinhart and Siloni (2005) はこのパラメータを、「語彙・統語パラメータ Lexicon-Syntax Parameter」と呼ぶ¹⁾。

このパラメータにより、「語彙型言語 lexicon language」/「統語型言語 syntax language」という類型が設けられる。英語・オランダ語・ヘブライ語・ロシア語・ハンガリー語等は「語彙型言語」に含まれ、フランス語を含むロマンス語・

ドイツ語・チェコ語・セルボ＝クロアチア語・ギリシア語等は「統語型言語」である (p. 391)²⁾。

(1) *The Lex-Syn Parameter*

Universal Grammar allows thematic arity operations to apply in the lexicon or in the syntax.

(Reinhart & Siloni 2005 : 391)

すなわち「再帰」や「中間構文」等を派生する arity operation そのものは普遍であるが、それが適用されるレベルが異なるのである。語彙型言語においてはパラメータが lexicon にセットされ、統語型言語においては syntax にセットされている。

中間構文についてもこのパラメータによる通言語的な変異がみられる。これについては7節で詳述する。3節～6節においては、中間構文からは離れるが、Reinhart and Siloni (2005) の理論の基本的な部分を把握するため、「再帰」と「相互」を中心に見ていく³⁾。

3. 再帰化 (Reflexivization)

まず、Reinhart and Siloni (2005) が「再帰動詞 reflexive verbs」と呼ぶ構文を見てみよう。ここで Reinhart and Siloni のいう「再帰動詞」とは、英語においては (2a-c) のような文にみられるものである。

(2) a. John washed.

b. He shaves every morning.

c. She always dresses elegantly. (『ジーニアス英和大辞典』)

つまり英語では zero morphology (p. 390) によって表されるものであり、himself のような再帰代名詞を用いるものではない。フランス語における (3) のような代名動詞の文に対応するものである。

(3) a. Jean s'est lavé.

b. Il se rase.

c. Il s'habille.

Reinhart and Siloni は、英語の他動詞文の (4a) と「再帰」の (5a) は、それぞれ (4b), (5b) の解釈を受けるものとする。

- (4) a. Max washed the child.
 b. $\exists e[\text{wash}(e) \ \& \ \text{Agent}(e, \text{Max}) \ \& \ \text{Theme}(e, \text{the child})]$
- (5) a. Max washed.
 b. $\exists e[\text{wash}(e) \ \& \ \text{Agent}(e, \text{Max}) \ \& \ \text{Theme}(e, \text{Max})]$

(以上, Reinhart and Siloni 2005 : 399)

基本となる他動詞のエントリーから, 「再帰」の項構造を派生する再帰化の操作 (reflexivization operation) は, 以下のように表示される。

(6) Reflexivization Bundling

$[\theta_i] \ [\theta_j] \rightarrow [\theta_i - \theta_j]$, where θ_j is an external θ -role.

(Reinhart and Siloni 2005 : 400)

つまりこの操作は, 何らかの θ 役割 (θ_i) を, 外項が担うべき θ 役割 (θ_j) と束ねてセットにしてしまう。そしてこの束ねられた役割は, 統語的には外項の位置に実現される項が担う。

この操作そのものは, 英語のような語彙型言語にも, フランス語のような統語型言語においても適用される。異なるのはそれが適用されるレベルで, 前者においては語彙レベル (lexicon) において, 後者においては統語レベル (syntax) において適用されるのである。

Reinhart and Siloni (2005) は, 各言語がいずれのタイプに属するのを見分けるための, いくつかの diagnostics を示している。本稿ではそのうち, ECM (exceptional Case-marking) 構文の許容に関わるものと, 「生産性」に関わるものの2つに注目してみたい。

4. ECM (exceptional Case-marking) 構文

フランス語の再帰構文 (再帰用法の代名動詞) は, (7) のような ECM と呼ばれる構文を許容する。

(7) Jean se considère intelligent.

(Reinhart and Siloni 2005 : 394)

(7) のような再帰構文が可能であるのは, 統語型言語のみである。語彙型言語である英語の再帰動詞においては, (8) が示すように ECM は許容されない。

(8) *Dan considers intelligent.

(Reinhart and Siloni 2005 : 395)

もちろん英語においても(9)のように再帰代名詞 himself を用いれば可能であるが、これは Reinhart and Siloni の言う「再帰動詞」とは異なる構文である。

(9) Dan considers himself intelligent.

(*Ibid.*)

Reinhart and Siloni (2005) は、語彙・統語パラメータの diagnostics のひとつである ECM について、以下のように説明する。すなわち ECM 動詞の再帰化においては、(6)の操作によって2つの異なる述語 (predicate) の項 (argument) を同一指示としてまとめることになる。語彙レベルにおいては、独立した2つの述語の間でこのような関係を構築することは不可能である。(6)が統語レベルで適用される場合においてのみ、可能となる (pp. 408-409)。

5. 生産性 (productivity)

語彙・統語パラメータの diagnostics と考えられている現象のひとつに、生産性 (productivity) の相違がある。フランス語などの統語型の言語においては、(6)の「再帰化」の規則は、非常に生産性が高い。これに対して、ロシア語などの語彙型の言語においては限られたタイプの語彙にしか適用されない。

(10) はフランス語, (11) はロシア語の例である。

(10) a. Jean se dessine.

b. Jean s'aime.

c. Jean se cache.

(11) a. *Ona ljubits'a.

she loves (REFL)

b. *Ona risu'ets'a.

she draws (REFL)

(以上, Reinhart and Siloni 2005 : 410-411)

たとえば (10b) と (11a) のコントラストが示すように、外項が「動作主 Agent」ではなく、「経験者 Experiencer」の場合の再帰化は、統語型のフランス語では可能であるが、語彙型のロシア語においては許容されない。Reinhart and Siloni (2005) によると、(6)の規則の適用による「語彙的再帰 lexical reflexives」が可能なのは、語彙型の言語を通じてほぼ共通の一群の動詞に限られるという。「人々が自分自身に対して行う傾向にある動作」が再帰動詞 (reflexive verbs) を

形成する，ということが従来言われているが，Reinhart and Siloni (2005) はそのような「傾向 tendency」はあるものの，「定義 definition」と呼べるほどのものではないと言う。その根拠として「身体の手入れ」に関わる概念 (grooming concepts) 以外にも，*equip* や *arm* に対応する動詞は，語彙型のヘブライ語において再帰動詞が可能であるが，これらが同言語において再帰動詞を形成し得ない *feed* を意味する語に比べて，より典型的な再帰的行為 (more typically reflexive activity) であるとは言えない，と述べている。そして語彙型言語において再帰動詞を許容するのは，Agent-Theme の項構造を持つ動詞の下位クラス，というところまではわかっているが，それ以上の定義は不明である，としている (p. 411)。

Reinhart and Siloni (2005) のこの指摘は，Kemmer (1993) の「事態の関与者の識別可能性 degree of distinguishability of participants」に基づく，「中動」と「再帰」の区別を想起させる。「体を洗う」という行為は多くの場合，自分自身を対象として行われる。これに対して「見る」という行為は，自らを対象とすることもあり得るが，他の人や物，すなわち他者を対象とする方がより一般的であろう。前者の場合はかなりの確率で動作主と被動者の同一指示が予想されるが，後者の場合は同一指示であるとすれば，それは偶然にすぎない。また鏡などに写った自らを見る場合，「見ている自分」と「見られる自分」の識別可能性は比較的高いが，「自分の体を洗う」という行為を行う場合は，「洗う自分」と「洗われる自分」の区別を特に意識することなく，ひとつの行為として行うのが普通であろう。「身体動作の中動 body action middle」と呼ばれる行為のうちでも，「腰掛ける」や「身をかがめる」などになると，2つの意味役割の識別可能性はさらに低くなり，自動詞的概念に近づく。Kemmer が “one form language” と呼ぶフランス語においては，いずれの事態も同じ再帰の接語代名詞の *se* を用いた構文で表すが，“two form language”であるロシア語においては，「再帰」の場合は heavy form である自立語の再帰代名詞 *себя* が用いられ，「中動」の場合は light form である接尾辞の *-ся* を伴った動詞の屈折形態が用いられる。

(12) ロシア語

a. 再帰

Она оглядывает	себя	в	зеркало.
she watches	REFL-Acc	in	mirror

「彼女は鏡で自分の姿を見ている。」

(『博友社ロシア語辞典』)

b. 中動

мыться ‘自分の体を洗う’; садиться ‘すわる, 腰を下ろす’;

наклоняться ‘身をかがめる’

(13) フランス語

a. 再帰

Elle se regarde dans la glace.

b. 中動

se laver ‘自分の体を洗う’, s’asseoir ‘すわる, 腰を下ろす’, se pencher ‘身をかがめる’

Reinhart and Siloni (2005) の分析と, Kemmer (1993) のそれを重ね合わせれば以下のように考えることができる。ロシア語の (12b) にみられるような, two form language の中動標識 (middle marker) である light form を伴う形態は, Reinhart and Siloni (2005) の言う語彙型言語における再帰動詞, すなわち語彙レベルにおいて (6) の再帰化の規則を適用されたものに相当すると言えるのではないか。語彙型言語において再帰動詞を取り得る, 限定された動詞の下位クラスの意味的特徴は, Reinhart and Siloni (2005) が言うように「定義」として規定することは難しいかもしれないが, 少なくとも「傾向」はある。そしてその「傾向」は Kemmer (1993) の「参与者の識別可能性」で説明できるものと思われる。

ところで先に Reinhart and Siloni (2005) が「傾向」にすぎない考える理由として, ヘブライ語において *feed* の意味を持つ語が再帰動詞を持ち得ないことを挙げているのをみた。しかしながら, やはり語彙型言語であるロシア語においては, (14) に示すように他動詞 *кормить* に対応する *ся* 動詞 (再帰動詞) の *кормиться* がある。

(14) ロシア語

他動詞: **кормить**

1. (人に) 食べさせる, (動物に) 餌をやる
2. (ひとりでは食べられない者に) 食べさせてやる
3. 扶養する

再帰動詞：**кормиться**

(動物が) 食べる, 餌をとる; (人が) 食べていく, 生計をたてる; 〈造格 (instrumental) の補語を伴って〉 ~ **рисом** [**мясом, рыбой**] (人が) 米 [肉, 魚] を食料とする

(以上, 『研究社露和辞典』より)

このような例をみれば, 語彙型の言語においてどの動詞が再帰化を許容するかは, 大きな「傾向」をふまえた上で, 言語ごとに若干のゆれがあるものと考えるのが妥当であろう。

英語の場合を考えてみよう。英語において Reinhart and Siloni (2005) が「再帰動詞」とみなしているものは, wash, shave など, 他動詞すなわち他者に向けられる行為の場合と同形態である。ロシア語の **-ся** のような接辞 (affix) さえ持たず, 中動標識に関してはゼロ・マーカーであり, 究極の light form と言える⁴⁾。おそらくこのためであろうが, 英語における「再帰動詞」はより狭い動詞クラスに限定されているように思われる。身体の手入れ (grooming) に関わるものがほとんどである。equip については equip oneself が優勢であるし⁵⁾, grooming であっても dress は再帰動詞とともに dress oneself の用法もある。

6. 相互 (reciprocal)

Reinhart and Siloni (2005) の「語彙・統語パラメータ」は, 相互の用法においてもみとめられる。興味深いのは, 再帰の場合と同様, 「語彙型言語」においては相互的用法を許容するのは, 「キスをする」「ハグする」など「典型的に相互的な」意味を持つ動詞の集合に限定されているのに対して, 「統語型言語」においてはより生産的 (productive) であるということである。そして ECM (exceptional Case-marking) が許容されるのも, 「統語型言語」のみである (pp. 416-417)。

前者の「生産性」についての語彙型／統語型の相違は, やはり Kemmer (1993) による, 以下の指摘を想起させる。Kemmer (1993) は “naturally reciprocal event” と呼ぶものの存在を指摘する。これには meet 「出会う」のような, その意味からして本質的に相互的な事象と, fight 「戦う」や kiss 「キスをする」のような, 多くの場合において相互的である事象の 2 つのタイプがみられる (Kemmer 1993 : 102)。フランス語の代名動詞としては, (15 a-b) がそれぞれの

例といえる。

(15) naturally reciprocal event

a. Ils se sont rencontrés à la gare.

b. Ils se sont embrassés.

これらの“naturally reciprocal event”に対して、たとえば regarder「見る」にかんしても、互いに見つめ合うということもあるだろうが、たまたま相互的であった事象にすぎない。「統語型」のフランス語においては、この場合にも代名動詞を用いる。

(16) Ils se regardent (l'un l'autre).

ECM (exceptional Case-marking) については、Reinhart and Siloni (2005) は以下の例を挙げている。

(17) a. ハンガリー語 (語彙型)

*János és Mari okos-nak talál-koz-t-ak.

János and Mari smart-DAT find-REC-PAST-3PL

(Intended meaning: 'János and Mari considered each other smart.')

b. イタリア語 (統語型)

Giovanni e Maria si sono visti danzare.

Giovanni and Maria SI are seen dance

'Giovanni and Maria saw each other dance.'

(Reinhart and Siloni 2005 : 417)

これは「語彙型」であるハンガリー語においては ECM は許容されないが、「統語型」のイタリア語においては可能であることを示している。

7. 中間構文

Reinhart and Siloni (2005) の中間構文にかんする記述は、その多くが Reinhart の理論の枠において中間構文を分析した Marelj (2004) を援用する形で行われている。前節までで見てきた、ECM と生産性という 2 つの「語彙・統語パラメータ」の diagnostics について、中間構文も同様の結果を示す。

ECM にかんしては、以下の例が示されている。

(18) a. フランス語 (統語型)

Des sujets de ce type se considèrent facilement très intéressant.

「この種のテーマは興味深いものであると、容易にみなすことができる」

b. 英語 (語彙型)

*Subjects of this type consider easily very interesting.

(Reinhart and Siloni 2005 : 425)

「生産性」にかんしては、対応する他動詞の主語が経験者 (Experiencer) である場合のコントラストを挙げている。

(19) a. フランス語 (統語型)

Les ennemis cruels se détestent facilement.

b. 英語 (語彙型)

*Cruel enemies hate easily.

(*Ibid.*)

「統語型」/「語彙型」の相違は、中間構文にかんしては、それが非対格 / 非能格のいずれの構造をとるかという問題にも関係してくる。Ackema and Schoorlemmer (1995) は英語やオランダ語の中間構文について、受動文のような移動の操作によって派生されるものではなく、表層の主語は外項 (external argument) であり、基底の構造 (D-Structure) の段階から、主語の位置に直接生成されるものとする (p. 174)。したがって英語やオランダ語における中間構文は、受動文や反使役 (anticausative)⁶⁾ の構文とは異なり、非能格の構造を持つということになる。

このことは、叙述の種類や「個体レベル述語 / ステージレベル述語」の区別にも関わってくる。Kageyama (2006) は中間構文は、日本語や英語にみられる「異常受身 peculiar passive」と呼ばれる構文とともに属性叙述文であり、「個体レベルの叙述 individual-level predication」とみなす。そして Kageyama もまた、英語および日本語の中間構文の主語について、基底生成されるものとする。

一方、フランス語については事情が異なる。Reinhart and Siloni (2005) は、英語やオランダ語などの「語彙型言語」の中間構文については、Ackema and Schoorlemmer (1995) の分析と同様に、移動 (movement) を伴わず、主語が外項のステイタスを持つ、非能格の統語構造を持つと考える。だがフランス語などの「統語型言語」の中間構文は、受動文などと同様の、移動 (movement) により派生される非対格の構造を持つものとする (pp. 424-425)。

筆者は井口 (2010, 2012) において、フランス語の中間構文型の受動的代名動

詞は、pour NP を従えた場合には容認可能性が低くなることを示し、これは英語の中間構文が for NP と全く問題なく共起することと対照的であることを指摘した。以下に一部重複するが、このデータが示すところを述べる。

(20) That book reads quickly *for Mary*.

(Stroik 1992)

(21) a. *?Ce livre se lit facilement *pour Paul*.

b. *Ce texte latin se traduit facilement *pour Paul*.

c. *?Aucun texte latin ne se traduit facilement *pour Paul*.

(20) に見られるような「for NP」は、もともと Stroik (1992) によって潜在動作主が明示されたものとみなされ、英語の中間構文がこれと共起するということは、むしろ統語レベルにおいて動作主が存在するということを表す証拠として示されたものである。しかしながら Ackema and Schoorlemmer (1995) が指摘するように、同様の経験者を表す「for NP」は (22) のような形容詞述語とも共起する。

(22) This book is too thick *for Mary*.

(Ackema and Schoorlemmer 1995 : 179)

「for NP」は受動文における「by NP」とは異なり、動詞の項を直接表すものではなく、述語の表す形容詞的概念が適用される領域を限定するものなのである。したがって筆者は、Stroik (1992) の意図とは逆に、「for NP」との共起は英語の中間構文における述語が、語彙レベルにおける操作を受けて形容詞に近い性格の「個体レベル述語 individual-level predicate」になっていることを示すものと考ええる。つまり英語の中間構文が非能格の構造を持つことを支持するものなのである。これに対してフランス語の場合は、(21) が示すように経験者の「pour NP」を許容しない。これはフランス語の中間構文型の受動的代名動詞が、英語などとは異なり、非対格の構造を持つことを示唆するものと考えられるのである。

Reinhart and Siloni (2005) の類型にもどると、ここまで見てきたように、「再帰」、「相互」、「中動」いずれの操作においても、フランス語は英語やロシア語に比べて生産性が高い。ECM についても、(7), (18a) が示すようにフランス語は許容する。このようにフランス語が「統語型」であることを示す証拠が独立して存在するということは、この言語における「中間構文」(中間構文型の受動的

代名動詞) が非対格の構造を持つことを支持することになるのである。

8. 結 語

本稿においては、再帰や相互の構文や中間構文などを含めた、項構造に変更をもたらす操作 (arity operation) が関わる構文が、その操作を「語彙 lexicon」のレベルによって受けるか、あるいは「統語 syntax」において受けるかということは言語によって決まっているという Reinhart and Siloni (2005) の主張、およびそれを裏付ける diagnostics のうち、「ECM を許容するか否か」と「生産性の相違」の2つに特に注目して考察してきた。

「語彙型言語」は、「統語型言語」に比べて生産性が低く、限られた意味範囲の動詞しか許容しないという事実は、非常に興味深く思われる。再帰化、相互化の操作について言えば、語彙型言語が許容するのは、「自分自身に」もしくは「お互いに」向けられるのが自然な動作に限られる。このことは、語彙型言語においては、一般に「再帰」や「相互」とみなされる動作のうち、まさに「中動」のカテゴリーに属するもののみを、当該の形態で表し得ることを示すものである。

またフランス語について言えば、ECM を許容し、英語やロシア語に比べて生産性が高いということは、この言語が「統語型」であることを示している。このことはフランス語における受動的代名動詞が、非対格の構造を持つことを支持することになる。

註

- 1) このパラメータは active lexicon の存在を前提としており、その点において Marantz (1997) 等の分散形態論 (Distributed Morphology) の立場とは対立する (Reinhart and Siloni 2005 : 389)。
- 2) Lekakou の類型と Reinhart and Siloni (2005) の類型は、異なる理論的立場から打ち出された、独立したものであるが、結果として示された言語の線引きにかんして言えば、両者がともにサンプルとしている言語については重なるところが多い。ただ、ドイツ語については、Reinhart and Siloni (2005) においては「統語型」とされるのに対し、Lekakou (2008) では英語と同様の語彙レベルにおいて Gen がコード化されるタイプに分類される、という相違が見られる。
- 3) このように Reinhart and Siloni (2005) の類型は、再帰、相互そして中間構文という、項構造に関わるいくつもの文法現象に及ぶマクロなものである。これに対して Lekakou (2005, 2008) の提示する類型は、対象を中間構文にほぼ特化したものである。

- 4) この点では、いわゆる中間構文や, break, melt 等の反使役 (anticausative) と同様である。
- 5) 『ジーニアス英和大辞典』によると, 「…のために身じたくする; (人が) 素養を身につける」の語義の場合は「通例 equip oneself」とある。
- 6) ここで言う「反使役 anticausative」とは, 使役交替 (causative alternation) における自動詞形態のことである。フランス語の *Le verre s'est cassé*, ‘グラスが割れた’における se casser, 英語の *The snow melted*, における melt 等がこれに当たる。

参考文献:

- Ackema, P. & M. Schoorlemmer (1995), “Middles and Nonmovement”, *Linguistic Inquiry*, 26-2, 173-197.
- 井口容子 (2010), 「フランス語の受動的代名動詞と中間構文」, 『ステラ』29, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 67-77.
- 井口容子 (2012), 「中間構文における任意動作主と未完了アスペクト」, 『ステラ』31, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 1-9.
- Kageyama, T. (2006), “Property Description as a Voice Phenomenon”, Tsunoda, T. & T. Kageyama (eds), *Voice and Grammatical Relations*, Amsterdam, John Benjamins, 85-114.
- Kemmer, S. (1993), *The Middle Voice*, Amsterdam, John Benjamins.
- Lekakou, M. (2005), *In the Middle, Somewhat Elevated – The Semantics of Middles and its Crosslinguistic Realization*, Ph.D. dissertation, University College London.
- Lekakou, M. (2008), “Aspect Matters in the Middle”, Biberauer, T. (ed), *The Limits of Syntactic Variation*, Amsterdam, John Benjamins, 247-268.
- Marantz, A. (1997), “No Escape from Syntax: Don’t try Morphological Analysis in the Privacy of Your Own Lexicon”, *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics*, 4.2, 201-225.
- Marelj, M. (2004), *Middles and Argument Structure across Languages*, Ph.D. dissertation, OTS, Utrecht University.
- Reinhart, T. & T. Siloni (2005), “The Lexicon-Syntax Parameter: Reflexivization and other Arity Operations”, *Linguistic Inquiry* 36, 389-436.
- Stroik, T. (1992), “Middles and Movement”, *Linguistic Inquiry* 23, 127-137.

[辞書]

- 木村彰一他編『博友社ロシア語辞典〈改訂新版〉』, 博友社, 1995.
- 小西友七・南出康世『ジーニアス英和大辞典』, 大修館書店, 2001.
- 東郷正延他編『研究社露和辞典』, 研究社, 1988.